AJEQ News Letter

Association japonaise des études québécoises 日本ケベック学会ニュースレター

2018年 夏号 第9巻第2号(通算25号) 2018年7月31日発行

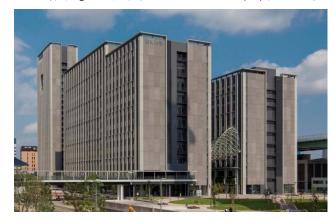
AJEQ第10回全国大会に向けて

関 未玲(愛知大学)

2018年10月13日(土)にAJEQ第10回全国 大会が、愛知大学名古屋キャンパスにて開 催されます。2013年の関西学院大学に続き、 二度目の関東圏以外での開催となります。 開催校を代表して、ぜひ名古屋駅からもア クセスの良い愛知大学での全国大会に、一 人でも多くの皆さまにご参加いただければ 幸いと思っております。名古屋キャンパス は日本国際博覧会「愛・地球博」のサテライ ト会場であった笹島地区の再開発にともな い、JICA中部国際センターや中京テレビの 新社屋、複合商業施設であるグローバルゲ ートとともに、2012年4月に誕生しました。 最寄りのあおなみ線「ささしまライブ」駅 からは、歩行者デッキを利用すれば、雨に も濡れることなくお越しいただけます。

第10回を迎える記念すべき今大会では、AIEQ(国際ケベック学会)の助成により、歴史学者・社会学者として国際的に著名なジェラール・ブシャール教授を招聘するこ

ととなりました。立花英裕AJEQ会長、丹羽卓大会実行委員長、伊達聖伸AJEQ副会長をはじめ、多くの会員の尽力により今回の来日が実現いたしました。ケベック大学シクチミ校教授であり、またカナダ総督賞受賞者でもあるブシャール教授は、2007年から2008年にかけてケベック州政府の諮問委員会(「文化的差異に関する調和の実践をめぐる諮問委員会」)の共同委員長を務められ、マギル大学名誉教授であるチャールズ・テイラー氏とともに、「ブシャール=ティラー報告」を提出されたことは、皆さまも



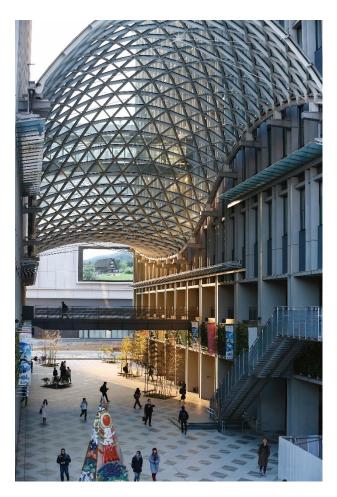
愛知大学名古屋キャンパスの外観

●本号の内容●

記憶に新しいことと思います。本報告書は、多くの移民を抱えるケベック社会において 異文化間の軋轢をいかに克己してゆくのか、 現状を調査するとともに、共生の可能性を 示唆する重要な報告です。その一部がまと められ、日本でも出版された『多文化社会 ケベックの挑戦』をはじめ、『間文化主義』 などブシャール教授の訳書には多くの AJEQ会員が携わっており、本大会を通して ケベック社会の現状と、21世紀の新たな共 同体の可能性について熱い議論が交わされ ることと思います。

大会のおもなプログラムとしては、ジェ ラール・ブシャール教授の基調講演 「nation 構築にかかわる神話と想像域」(仮)を柱と する、杉原賢彦会員、伊達会員、大石太郎会 員、法政大学の大中一彌教授によるシンポ ジウムを予定しております。講演では、共 同体の成立過程において核をなす神話の必 然性とその是非について、「想像域」という ブシャール氏の提唱する概念をもとにお話 しいただく予定です。シンポジウムを通し て、ケベックや日本社会だけでなく、広く 「共生」の在り方を探る貴重な場となるこ とと確信しております。さらに近藤野里会 員と梅川佳子会員による自由論題での発表 も予定しております。また、今年度も長年 交流のある韓国ケベック学会より会員が来 日され、研究発表してくださいます。

毎年、議論が白熱し、会場からの質問の 止まないAJEQの年次大会ですが、今年は前 述のグローバルゲート内にて大会後の懇親



愛知大学内キャンパスモール

会が開かれます。長い一日となりますが、 お時間が許せば懇親会にもご参加いただければ幸いです。遠方からお越しいただける 会員の皆さまにとって、心ゆくまで議論を 尽くし、情報を共有する大会となるよう努めてまいりたく、宜しくお願い申し上げます。

(2018年度開催校代表)







<2017 年度小畑賞調査報告2> 久々のケベック訪問記

松川 雄哉 (南山大学)

私はケベックで学業を終え、2015年秋に 帰国しました。そしてこの度、約2年半ぶ りにケベックに 14 日間の研究滞在をする 機会をいただきました。3月5日に日本を 発ち、同日の夜、ケベック・シティのジャ ン・ルサージュ空港に着きました。そこで 聞こえてきたケベック・フランス語に、「帰 ってきた」という感覚を覚えました。ケベ ックの3月はまだ気温が低く、空港の外は 肌に刺さるような寒さでしたが、ケベック での生活の記憶がよみがえり、思わず顔が ほころんでしまいました。滞在2日目の午 前中はさっそく、ケベック・シティのシン ボルと言えるシャトー・フロントナックを 見に行きました。高台に建っているため、 ウッドデッキから眺めるセントローレンス 河は相変わらず絶景でした。

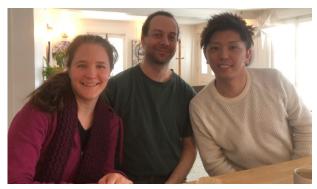
同じ日の午後から研究を開始するため、 受入大学である Laval 大学に向かいました。 今回の研究滞在では、私が博士課程の時に 指導教授であった Zita De Koninck 先生を受 入教官として、ケベックにおけるフランス 語教育についての研究に取り組みました。 彼女は移民のためのフランス語教育の専門 家です。2017年4月に教授のポストを退き、 現在は、3年の任期で非常勤として大学に 残り、大学院生を指導しています。彼女は 学生との面談のため週に2回大学に来てい ましたが、私の滞在中は、平日は毎日大学



シャトー・フロントナック

まで来てくださいました。午前中は図書館で資料収集をし、午後は先生との打ち合わせを重ねました。夜は大学院時代の懐かしい友人や別の先生と食事をしたり、知り合いとコンサートに行ったりしました。また1週目の週末は、大学院時代に習っていたタップダンスの先生のSylviaに会いました。この日は先生が住んでいるDonnaconaという町や、近くのDeschambaultという町に連れて行ってくれました。ケベック・シティから車で40分行ったところにある静かな町でしたが、冬でも綺麗な場所で、夏にまた来てみたいと思いました。

滞在の前半があっという間に終わり、後半は2泊3日の予定でモントリオールに赴きました。ここでの主な目的は、2人の先生に会うことでした。まずは、大学院時代に同じ研究室だった Diane Querrien というフランス人の友人で、モントリオール滞在中は彼女のアパートに泊めてもらいました。彼女も De Koninck 先生の指導の下で博士号を取得し、現在はコンコルディア大学でフランス語を教えています。彼女は、フラン



Sylvia (左)、パートナーの Thierry (中央) とともに

ス語教育や研究の話題になると話が止まらず、あっという間に時間が過ぎてしまいます。彼女の専門はフランス語の教員養成で、De Koninck 先生の大きなプロジェクトに関わっていました。彼女の博士課程の研究と今後のプロジェクトについて話を聞くことができ、今後の私の研究のヒントとなりました。

モントリオール 2 日目の目的は、モント リオール大学の Françoise Armand 先生を面 会することでした。彼女も De Koninck 先生 と同様、移民の子供のためのフランス語教 育の専門家です。とても忙しい時期だった ようで、ぎりぎりまでお会いできるかどう かわかりませんでしたが、彼女が審査する ことになっていた博士論文の最終口頭試験 が始まる 30 分前に少しだけお話をする機 会をいただくことができました。本当に短 い間ではありましたが、研究について助言 をいただき、さらに知り合いになれたこと は大きな収穫だったと思います。彼女との 短い面談を終えた後は、Michel Fortin とい う語学の教科書を専門的に扱っている本屋 へ行き、ケベックのフランス語教員によっ

て作られたフランス語の教科書(《Par ici (Les Éditions MD)》)を購入しました。この教材は、様々なテーマについてケベックで話されているフランス語を学ぶことができます。ある地域に留学したり、住んだりすると、少なからずその地域社会に関わっていかなければなりません。その際、学校で習う標準的なフランス語だけでなく、その社会でよく使われている単語や表現も学ぶ必要があります。その意味で、この教科書は移民がケベック社会に溶け込む助けとなっていると思います。

同じ日の夕方は、モントリオールに留学中の南山大学の学生2人に会いました。留学前は学生ビザの申請がうまくいかず、いつも不安そうな表情をしていましたが、モントリオールでたくましく成長した姿を見てうれしく思いました。南山大学では、徐々にケベック留学に興味を示す学生が増えてきています。今後もケベックの魅力を学生たちに伝えられればと思います。

今回の滞在で一番良かったことは、やはり De Koninck 先生に再会できたことだと思います。私の 2017 年度は、勤務校での教育や仕事に追われ、研究がおろそかになってしまっていました。先生に直接会って話し、叱咤激励を受け、研究に対する姿勢を正していただきました。改めて、先生の弟子でよかったと思いました。先生がまだ大学にいるうちに、先生からもっとたくさんのことを学び、今後の私のケベック研究の基礎を確立したいと思います。

<リレー連載「ケベックと私」第6回> ルパージュの演劇を介しての出会い

藤井 慎太郎(早稲田大学)

ケベックと私の関係の始まりといえば、 1996年にパリ(正確には郊外のクレテイユ) で見た『太田川七つの流れ』(Les Sept Branches de la rivière Ota) であった。それ以 前にもロベール・ルパージュの作品は東京 のグローブ座で見ていたのだが、そのとき にはさほど特別な思いを抱くこともなかっ た。ワーク・イン・プログレス形式をとるこ の作品は、1994年の初演当時は3時間程度 の上演時間でしかなかったのが、1996年に は休憩を含めて7部構成8時間の大作とな っていた。あまりに心を動された私は結局、 全部で3回劇場に足を運んだ。翌年6月の モントリオール公演が最終公演となるとい うので、アメリーク演劇祭(現在のフェス ティヴァル・トランスアメリーク) でもさ らに2回見た。

今の私であれば、広島、ホロコースト、AIDS (有効な治療法が見つかる直前のことで、まだ不治の病とされていた)といった、いささか大仰な「大文字の死」のオンパレードにはそう簡単に感動することもなかったし、むしろお涙を誘う物語の罠にからめとられぬように警戒してかかっていただろう。私もまだ若かった、ということだが、1957年生まれのルパージュもまた、このとき40才にも満たない若さだった。さらにいえば、1960年に「静かな革命」が始まり、1976年にケベック党が州政権を握り、根本

から変容を遂げたケベック社会もまた「若い」社会であったのだ。

『太田川七つの流れ』の俳優たちはフラ ンス語、英語、ドイツ語を操ってみせる。子 どもの頃から「東洋」的なものに惹かれて いたルパージュが、日加基金の助成金を得 て訪ねた広島/ヒロシマが出発点となって いるだけあって、ところどころに日本語の 単語や表現もちりばめられる。しかも、限 られた数の俳優によって演じられるこの作 品では、俳優も役とともに言語を切り替え、 カツラや衣裳を変え、つねに別の何者かに 変化していく。舞台装置が回転し、移動し、 様々な映像が投影されることによって、空 間もまたつねに姿を変えていく。いや、そ れをいうならば、作品そのものが、決して 完成し、安定することのないまま、上演地 を変えるごとに、稽古を重ねるごとに、変 化していく。ルパージュ作品はしばしば、 同じ作品であってもフランス語版と英語版 とでは相当にちがった印象を与えるし、 1996年11月のパリ・ヴァージョンと1997



ケベック・シティにあるルパージュのプロダクションセンター、La Caserne

年6月のモントリオール・ヴァージョンでは、同じファイナル・ヴァージョンと言われながらも、特に後半においてかなりの差異を孕んでいた。

言い換えれば、この作品は(二項対立的に定義される)アイデンティティを問題化している。言語、空間、俳優、作品自体のどれをとっても「同一」のものとしてとどまることがない。ドゥルーズの言葉を借りて言えば、ロベール・ルパージュの演劇こそ、表象=上演(représentation)の演劇に対置される反復=稽古(répétition)の演劇と呼ばれるにふさわしい。反復=稽古を繰り返す中で、その反復は差異を孕んだものとなるのだ。

さらにいえば、そこで問題化されるアイデンティティはケベック人のアイデンティティとも大きく関わる。1995年のレフェランダム直後のケベックではなおのこと、自らのアイデンティティはいまだ変わりゆき。これから構築すべきものであった。主権を求める運動とは、自らの過去を知り、乗り越えるべき現在を見つめ直した上で、来たるべき新しい社会を想像し、構想し、構築しようとするものである。そこには、自分を縛る過去や伝統を乗り越え、新しい表現の地平を求めるアーティストと重なる部分が大いにあるのだ。

今、思えば、ルパージュ作品(およびその登場人物)の多言語・多文化的、領域横断的、遊牧民的な性質に、運動、変化こそを自らのアイデンティティとするところに、演

劇(俳優、空間、言語・・・)のみならず、 社会、文化、思想に関する問いをも一挙に 立てて見せたところに、私は大いに共感し、 そこに自分を重ね合わせつつ、感動してい たのだ。

こうして私は 1996 年にモントリオール (そして、駆け足ながらもルパージュが本 拠地とするケベック・シティ)に足を運ん で、その文化と自然の豊かさ、人々の温か さに心を動かされた。2000年から2001年 にかけてはカナダ政府奨学金を得て、モン トリオールに 1 年留学するという願いもか なった。ブルヴァール・サン・ロランを挟ん で、英仏両言語共同体の「二つの孤独」とい うことがまだ実感として感じられた時期で ある(家賃を筆頭に物価もまだまだ安かっ た)。その後もケベックを定期的に訪れ、ケ ベックの演劇や文化政策について論文を書 き、ワジディ・ムワワドの戯曲を翻訳する 機会に恵まれてきたが、私にとってのケベ ックはまずこうしてロベール・ルパージュ を介して出会ったものなのである。

●編集後記●

今号も充実した内容になりました。執筆者 の皆様、ありがとうございました。また、写 真の一部は愛知大学広報課および神崎舞会員 にご提供いただきました。ここに記して感謝 の意を表します。では、名古屋で! (T)

AJEQ ニュースレター

年3回発行

発行人:立花英裕 編集人:大石太郎